第１分科会「はじめの一歩～子ども社会参画にむけて」

参加者　６０人　　**担当：山浦彬仁**

分科会内容

1．基調講演　『子どもの社会参画活動を知る！学ぶ！』
　講師：三神尊志さん（特定非営利活動法人Ｒｉｇｈｔ's理事）　＆　新谷周平さん（東京大学大学院）

2．子どもが社会参画をするための方法を論議する（グループ討論）
　①「社会参画は本当に必要なのか？社会参画で変わるの？」コメンテーター：澤井雅敏さん(千葉大学)
　②「社会参画実現のための問題点、またその解決策」　コメンテーター：新谷周平さん（東京大学大学院）
　③「生徒の学校参画を考える」　コメンテーター：吉田要介さん（千葉生徒会連盟初代代表）
　④「子どもの社会参画を支援する大人」　コメンテーター：大場博子さん（ＮＰＯ佐倉こどもステーション）

ある日、各実行委員発信のフォーラムの分科会の計画一覧を見て、山浦が言い出した。「子どもの社会参画（以降参画という）と言っておいて、参画についての分科会がない、これじゃだめだ！俺が参画についての分科会をやる！」と。「お前につきあうとろくな事はない。勝手にせい。」と言ったが、腐れ縁のせいなのか、言っていることには納得しているせいなのか、やはり付き合う羽目になった。それ以来、少ない時間で企画を考えたり、夜中まで資料を印刷したり、といった日々が続いた。それが終わると今度は、基調講演をしてくれる人を探した。

そんなこんなであっという間に分科会の日がやってきた。僕も当然この分科会に参加した。人が来るかどうか不安だ。もうあとは天に任せるしかない。そんな不安をよそに、準備と打ち合わせをしている間ににもだんだんと人が集まり、気がついたら５０人は集まっていた。だが、また安心できない。何しろ基調講演をお願いした２人には、ひとりは一度しか会っていないし、もうひとりは全く会っていないのだ。本当に天にまかせるしかない心境だった。

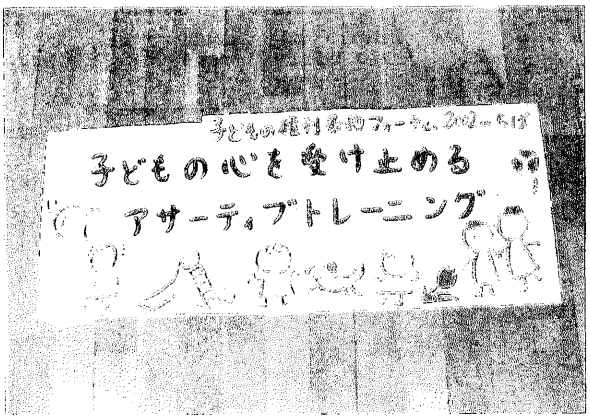
しょうがないから腰を落ち着けて基調講演を聞いてみると、もうとてもよかった！！自分たちも参画に対する気持ちはそれなりにアツイつもりなのだが、何かが違った。学があるというか何というか、さすがは天下の東大だなあと、うまくは言えないけれどすごかった。

討論会では感情が高ぶって泣いてしまう人もいたようだ。最初は４つのテーマに分かれていたが、昼を過ぎてからは、「学校」と「参画」の話の２つになっていた。やはり子どもを語る時には学校の話は大切なようだ。

この分科会は、参画の勉強や再認識を目的としたようだが、どちらかというと参加者よりも企画した山浦や自分たちの方が勉強した。分科会を企画したこと、子どもを支援する大人の本音、自分が忘れかけていた学校に対する子どもの気持ち、大事なことを勉強し、大事なことを思い出した分科会だった。

（文責：企画メンバーのひとり・三森篤志）

第２分科会
「子どもの心を受け止める
アサーティブトレーニング」



講師　特定非営利活動法人
　　ウィンズカウンセリングちば
　　馬渡静江さん　髙橋徳子さん
　　松本周子さん　うえだまさこさん

参加人数・２３名（スタッフ含む）

子どもの権利条約に触れたことのない人達にも、子どもの権利条約を広く知らせ、子どもの権利について知ろうとする心の動きを持つきっかけを作って行けたらと、考えて学びあう場を持ちました。

コミュニケーションの権利を基本に、アサーティブトレーニング（自己尊重・自己主張のトレーニング）を実施しているＮＰＯ法人ウィメンズカウンセリングちばの講師を迎え、主に「子どもの権利条約」のありのままの姿を認め合い、自己主張をしていくことを中心にグループワークを行いました。

１時間３０分の短い時間を有効に使うため、始まる前に講師とコミュニケーションをとり、参加者がそろったところで一人一人が皆とかかわれるようなワークでわいわい、ガヤガヤと始まりました。一気に緊張がほぐれたところで、私たちの権利と子どもたちの権利につながる話からグループワーク、ペアトークへと発展していきました。特に２分間の中で自分の考えを自分の言葉で話し、それをしっかり受け止めて聞くことの難しさと、どんな表現方法でも良いから相手に伝えることと「あなたの話を聞かせて」と誠意を持って丁寧に聞いてくれる関係の安心感を体験することができました。最後に自分や相手をほめる方法について、認め合える近道であるほめ言葉にはコントロールする力があることを知りました。

参加した人たちは学生、乳幼児の親や子育て真っ最中の親、子どもを中心とした活動をしている人、子どもを育て上げた人など幅広い年齢層で、いろいろな観点で積極的に参加し、和やかな雰囲気の中で安心してワークを終えました。

分科会後のアンケートに、遠方から参加した甲斐あった、まずは自分のありのままの姿を見つめて認めたい、毎日の子育てにすぐ役立てたい、ゆとりを持って子どもと向き合える自信を持った、などこの分科会に参加して満足感を得られた感想がありました。特に子育て真っ最中の人達が毎日の生活に不安や憤りを感じて小さい子どもに接していて、子どもの権利条約について身近に触れることで、ふっと肩の力を抜いて子育てができる安心と自信を持つきっかけになったと思います。

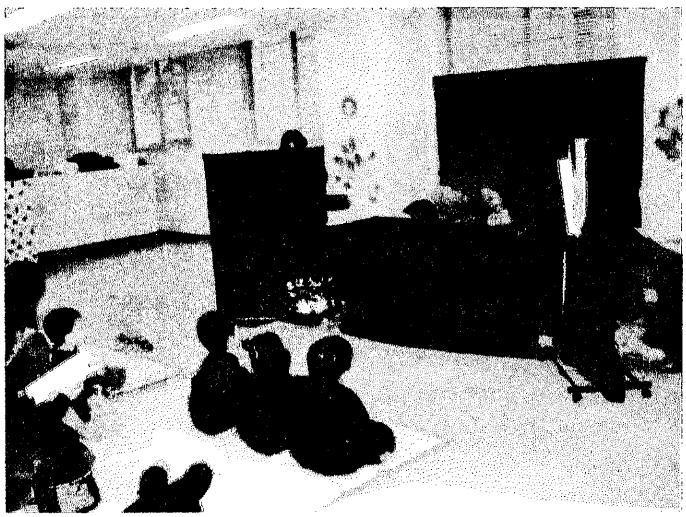
担当・報告　特定非営利活動法人四街道子どもネットワーク　塩沢千秋

第３分科会「あそぼ　あそぼ」報告

担当・報告　特定非営利活動法人　四街道こどもネットワーク　秋元智也子

小さな子どもたちもこのフォーラムの大切な参加者と考えて、保育という形ではなく、分科会の一つとして、幼児から大人までが安心して過ごせる場として設定した分科会「あそぼ　あそぼ」、一日を通じて延べ６０人ほどの大人と子どもが参加し、一日楽しい歓声が部屋中に響いていました。

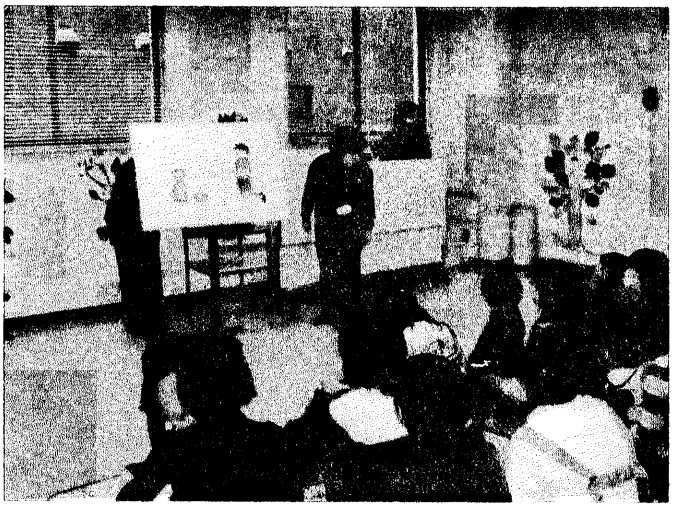
参加者へのプログラムとして、午前中に、人形劇団「まほうのて」による人形劇、午後より、「ゴンちゃんの絵本くらぶ」による絵本の読みきかせとパネルシアター、そして四街道こどもネットワークのスタッフによる冬のイメージあそびを設定し、その間に自由あそびの時間も設定しました。どのプログラムも出入り自由とし、開放的な雰囲気の中で誰もが気軽に参加できる場であることにつとめました。



午前中に行われた人形劇団「まほうのて」による人形劇では、子どもたちの食い入るような真剣な表情が印象的でした。また、保育中の子どもたちだけでなく、親子で参加された人たちや、大人の参加も目立ちました。

大人の参加は全体を通じて大変目立ちました。その多くは子どもたちの歓声を聞きふらりと立ち寄り、子どもたちの楽しそうな表情を見て満足して去っていく「癒され型」の参加で、あらためて子どもたちの力の大きさを知りました。

さらに、保育や福祉の現場で働く大人の参加も目立ち、子どもだけではなく、広く大人にも関心を持たれるテーマであったことを再確認しました。



午後は、「ゴンちゃんの絵本くらぶ」による、読みきかせとパネルシアターで幕を開けました。午前中の人形劇同様、子どもたちはお話の世界にすっかり引き込まれ、楽しい時間をみんなで共有することができました。中でも、パネルシアターとエプロンを使ったエプロンシアターでの語りにはすっかり引き込まれ、歓声を上げる子どもたちの姿が見られました。

そして、最後は四街道こどもネットワークスタッフによる冬のイメージ遊び、これは新聞紙やシーツなど身近になる物を使って、イメージをふくらませながら子どもたちとひとつのストーリーを作っていくあそびです。参加した大人と子どもたちは雪山へ遊びに行き、新聞紙で雪を降らせたり、シーツのそりに乗ったり、雪の女王と友だちになったりしながら、部屋中を使って楽しく体を動かしました。

小さな子どもから大人までが参加できる分科会として出発した企画でしたが、参加した大人も子どもも、心から解放される場であったと思います。ただ、分科会の性質上、外に音が漏れてしまい、他の分科会に影響してしまったことは、今後の部屋割りの時に考慮すべき点として反省が残りました。

第４分科会
《子どもも市民！ティーンズで考える空間デザインワークショップ》

担当：市民ネットワークちば・子どもの居場所づくりをすすめるプロジェクト
参加人数：約25人
WSファシリテーター：福川裕一氏（千葉大工学部デザイン工学科教授）
福川研究室学生4人
報告者：谷口多恵

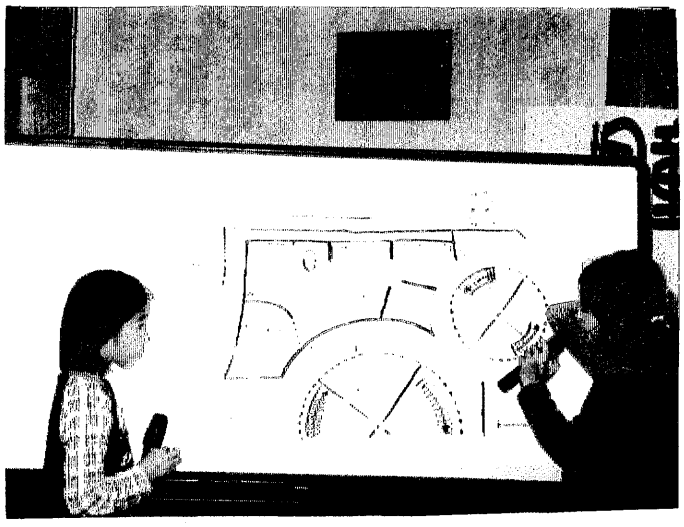
「児童センターの中にみんなの居間をつくろうよ」

9:30-10:00　千葉市の児童センター構想の説明・先進事例紹介
10:00-10:30　福川先生が私たちの構想を模型で紹介
ポストイットワーク　４チーム
居間にほしいもの、なあに？居間の使い方、ルールは？
10:35-11:35　模造紙ワーク、２００㎡をデザインしよう！
11:40-12:00　各チームの発表
12:00-12:10　福川先生によるまとめ

＊主催者のねらいは児童センターの中にあるひとつの部屋を幼い子どもから１８歳までの子どもが自由に使える居間にしようということで、その中身を多世代でデザインすることだった。そして、自由を謳歌するには、自主運営ということで、ルールづくりまでやってみようということだった。
＊当日参加の子どもは小中学生で、ほとんどが川西市からやってきた小学生だった。みんな、学校大好きの子どもたちばかり。
＊ポストイットワークでは、おとなも子どもも大きなテーブルやこたつや囲炉裏を囲んでのおしゃべりコーナーとひとりになれる空間も必要としていることがわかった。伝言板・コンピューター・テレビ・食事コーナーは必需品。
＊模造紙ワークでは、上からみた平面図で書く子ども、横から見える形で書く子どもが混じって、ユニークな絵になった。絵を描きあいながらの子どもたちとの会話でルールづくりを話し込むところまではいかなかった。
＊４チームの発表者は子どもたち。関西弁まじりの元気なことばがとびかった。

③グループ

過去の部屋へ石だたみを踏んではいる。昔を懐かしめるおもちゃや音楽や古時計がある。未来の部屋の床にはガラス張りの水槽。大きなテーブルは形を自由に組み合わせられる。白いピアノ、プーさんがいる。気まぐれなドアを抜けるとオープンカフェがある。部屋の川はそとにつながり、池となる。



②マイリラチーム

靴をぬいで、伝言板の横をとおる。大きなテーブルの近くには本箱から好きな本をとってよむソファ。お茶コーナーもある。スクリーンでは映画をみれる。和室コーナーには掘りコタツ。隣にはぷりくら。中２階があって、音楽をひとりで楽しめるコーナーがある。ひあたりのいいところに日時計。３人のお手伝いさんがいて映画を決めたり、お茶をくれたりする。

①グループ

存分に遊べるように時計がなく、テレビがあり、交流広場があり、仲良くなった子とぷりくらを楽しむ。パソコンもできる。ハムスターやネコや犬などとのふれあい広場、ターザンひろば、みんなの隠れ家がある。のぼりはふつうの階段、くだりは地下まで滑り台。本棚の形は星型、花形。ふわふわじゅうたんで、ねころがって読める。食堂は自販機もあって、自分たちでも作れる。作ってくれる人もいる。掲示板は自慢できることやニュースをはって楽しみあう。

④なごみチーム

リラックスできる和風の感じからなごみってつけた。掲示板で知らない人との交流ができる。テレビ、本、漫画、ＣＤ，ＭＤが楽しめる。マットレスの
ふわふわ空間のまわりは緑や花がいっぱい。個室もあって、自然に囲まれている。テーブルは大・中・小にわけられる。ほりこたつのところはテレビがあって、伝統的なかるた遊びなど楽しめる。入り口はどこからでも入れるように壁がない。

＊福川先生のまとめ

『楽しかったね。早くこんなところのキッチンでご飯食べたいナー。学生たちとうちあわせしてきたけれども、みんなの絵は予想以外のすごいもの。なごみとかリラックスとか、求めているんだね。空間というのも、しっかりとらえていてすごいもんだね。今日のを参考にしておとなの人たちがいいものにしてくれるでしょう』

分科会５

こんな学校・あったらいいよね

――誰でも楽しく参加できるワークショップ――

行きたくなる、学びたくなる、誰もが利用できるユニバーサルデザインの学校を模造紙いっぱいに紙や毛糸・布・クレヨンなどを使って自由に表現してもらいました。

参加者は１４名で１２作品ができました。（お子さんが５作品・大人７作品）

大きな模造紙を前に子供も大人も真剣そのもの。脇目もふらず熱中して自分の中にある学校への思いや希望を表現する作業に取り組んでいました。

楽しく談笑も

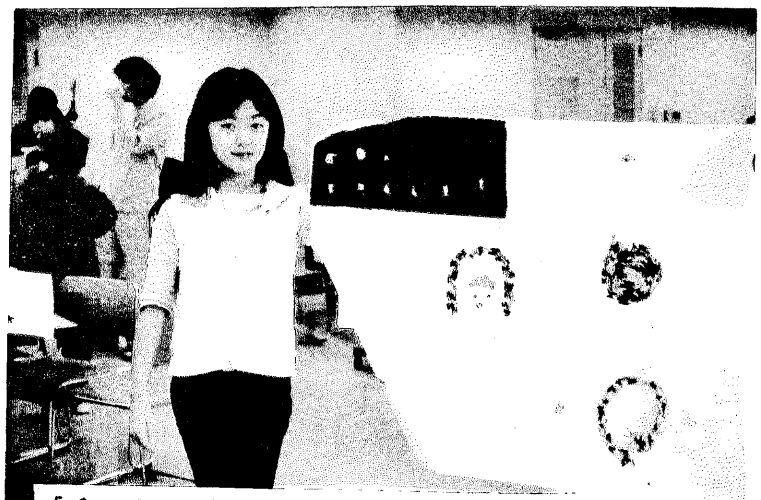
２時間近く熱中

「・・・・・」

（作品から）

- 好きなことだけやっていればイイ学校
  （畑を作って喫茶店経営・音楽はギターとか好きな楽器が楽しめる）
- ゲームができ、休み時間には制限されずにサッカーや野球ができ、学校ごわしがある
- きれいなトイレで中で本が読める。
  図書館がある。寝ころんで本が読める
- とっても広くて田んぼや木が沢山ある学校
- 食堂や図書館、温水プール、こたつのある地域の人と一緒に使える平屋の学校
- ９年分の教育チケットがもらえ、
  いつでもどこでも使える

できあがった作品は発表しあいました。



「チャイムの代わりに花びらが降ってくるの・・」

子供もおとなも学校に対する思いはどっさりあると感じました。学校に対する思いやアイディアを自由に表現し、発言できる機会がもっとあってもいいのではないでしょうか。

第６分科会　小児科医毛利子来さんと子育て・教育基本法を学ぶ
―子どもの権利実現と教育基本法―

講演・毛利子来、司会・喜多明人、参加人数・約５０人

座談会のように進めませんか、と毛利先生が提案したので、終始なごやかな雰囲気の中で教育基本法と１１月にだされた中教審によってまとめられた中間報告教育基本法改正案について意見が活発に交わされ、座談会のように進められました。

改正案の個人に対する考え方と日本人のアイデンティティについての問題点について、毛利先生は、学校での行動がおかしいと思われると検査や病院がすすめられる現状をあげ、個性が尊重されていないのではないか、また会場の参加者からは、個性を特別な能力ではない、良い悪いと比較する“普通”にしばられすぎている、ありのままを受けいれるものだ、と個性に対する考え方が出されました。民族を敬うことの強制ともいえる日本人のアイデンティティ等については、子どもへの精神的ストレス、排他的で狭い考え方だと批判の声があがりました。また、毛利先生は、戦前の教育を劇的に変えた教育基本法がまったく審議されずに改正されようとしているだけでなく、改正案は戦前をおもわせる公や愛国心を強調しているが、どうやったらこの動きが止められるかについて考えなければならない、と強く言いました。

今の教育現場では教育基本法がどのようにいかされているか、と質問され、喜多先生は、学校や教育政策でも教育基本法がいかされてはいないし、現場の教師は休みがほとんどなく教育委員会や校長によってもしばられていることで教育がおろそかになってしまい、子どもたちにしわ寄せがいってしまうので、余裕が必要と説明しました。一方で、出席していた現場の教師からは、勤務校での子どもの権利条約をいかした学校づくりを紹介しました。そこでは学校を子どもにとっていかにいきいきと活動できる場をつくるかということで先生たちが一体となって取り組み、ノーチャイムや６時間授業がないこと、子どもにとって楽しい場は先生にとっても楽しい場になること、このような学校づくりに校長や教育長も支持していること、教師と子どものパートナーシップがうまくとれていること、などの説明がされると、会場の出席者からは驚きの声があがりました。しかしこのようにうまくすすめられている例は少ない、という指摘もあり、他の教師からは、近代産業に要請される教育が進められて適応の仕方を教える場に学校はなってしまっているという問題があることもあげられました。

障害をもつ子どものお母さんたちから、子どもへの適性就学検査についてや学校の対応の問題があげられ、改正案のたくましい日本人像はさらに差別を助長する可能性があること、個別のニーズにこたえる包括的な教育をする場として学校はあるべきこと、学力や能力の考え方について考え直す必要があること、などが話し合われました。

さまざまな立場の方々が出席していたことから、教育についてさまざまな方面への改革が必要なこと、また改正案のはらむ危険は、どの立場の人たちにとっても危機的なものであること、が認識されました。最後に、教育基本法は、教育をつくる気持ちにならなけらばはいっていけないので、ただ受身になるのではなく、地域の教育をつくっていくことに全ての人が参加していかなければならない、として会はしめくくられました。

第7分科会

『語り場』　担当．山品　映こ

参加人数　16人

私、字がきれいとはお世辞にも言えませんが、今回はあえて手書きでいかせて頂きます。今や1家族に1台以上のパソコンがあり、書類等も手書きを受け付けないところがほとんどになってきました。しかし、文章（特に気持ちを含んだもの）はやはり手書きの方が目に見えない部分で伝わることが多いのは事実だと思います。そういった理由もあり、読みにくいでしょうが今回は「手書き」でいきます。

さて、「語り場」のべ参加人数16人　中学生～50才代以上まで
とても幅広くの人が来てくれました。ありがとうございました。
フラフラっときて、何をしゃべるわけでもなく、ただただいる人。
フラフラっときて、マシンがこのようにしゃべって　フッといなくなる人。
人それぞれの参加方法。自分のペースで参加する。これってすごく大切な事だと思いませんか？　これを読んでるあなたは自分のペースで歩けてますか？

親が子どもを捨てる時代、子どもが親を選べる時代。
おとなももっと「自分」を大切にしてみませんか？　それができないおとなに育てられた子どもが「自分を大切に」なんかできるわけないのです。
この分科会で「子ども」の意見、「おとな」の意見、「おや」の意見、いろいろ聞き、話題もあちこちに飛んでいながらいろんな話がでました。
だからこそ、いろんなことを感じる分科会になったと思います。
結果を出すより考えることの大切さを実践できた分科会でした。

2002/12/22　山品

第８分科会

シンポジウム・ＯＫ！不登校・ひきこもり

担当　下村功・松本正輝・下村小夜子　報告者　関川ゆう子

参加人数　５０人
司会　奥地圭子さん
シンポジスト
（不登校体験者）　須永祐慈さん（２３歳）・松島裕之さん（２０歳）
（親の立場から）　浦島菊代さん・西中間栄美さん

・。・°★・。・。☆・°　・。・°　。・。・°★・。・。☆・。・°★・。・。☆・°　・。・°　。・。・°

学校外の子どもの居場所フリースクール東京シューレ理事長の奥地圭子さんを司会に不登校を体験した２人の若者と２人の親に自らの体験を語ってもらった。

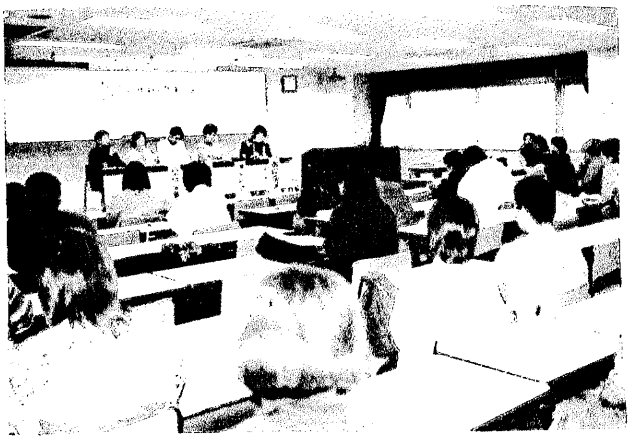
小４から学校に行かなくなった須永祐慈さんは、いじめがきっかけで不登校となった。先生に訴えても自分が性格を変えなければと言われ孤独になっていった。ずっと我慢していたが、学校へ行くのが辛くなってしまった。その後２年半ずっと家にいた。その間、須永さんが一番聞いてほしかったのは、自分のことであった。本人の苦しさを理解してほしかったという。苦しさが伝わらないのがもどかしかった。その後、親の会に親が行くようになり、親がほっとしてきたようであった。

徐々にではあったが、ゆっくりと家に居られるようになり、楽になってきた。楽になり時間を持てあますようになった須永さんは、その頃、東京シューレの体験記を読み、こんな思いをしたのは自分だけと思っていたが他にもいることに気づいた。小６年齢の時から７年半、１７歳まで東京シューレに通った。そこで学校へ行かなかったからできたことも経験した。小学校を休んでから１日も学校には通っていないと言う。

現在、須永さんは、自分たちが参加して作っていくシューレ大学の学生として不登校の歴史について調べている。「学校へ戻るという言葉だけで苦しんでいる子がいます。学校へ行かない子へのメッセージはありますか？というとそれはないです。僕自

身元気になった人の声を聞きたくなかったです。僕が言いたいのはまわりに対して、大人に対して訴えたいです。

現在コンビニエンスストアでアルバイトをして、スポーツチャンバラをやっている（スポーツチャンバラを初めてもう７年、近々インストラクターの免許をとる予定）松島裕之さんは、自分は学校に行けないだめな子なんだという思いこみや、宿題のプリントが届いたりするプレッシャーが辛かったという。日中家の外にでるのが辛かったし、放課後もクラスメートに会うのが怖かった。家の中も両親が学校のことを聞いてくるので辛かった。自分達のように自分の気持ちを口にしない子も、学校に行かないということでつらい思いをしていると思う。近所の人と顔を合わせるのが辛かったり、まわりがいいと言ってくれてもテレビなどで『１年生になったら、友だち１００人出来るかな♪』と流れていたりして苦しい。本当に身近な人の空間で体を休めていたいと思うので、お父さんお母さんは、子どもの一番そばにいるのだから子どもの味方であってほしい。」



また、松島さんの親は学校へ行かないことを受け入れてくれたが、学校に行っていないならフリースクールに行けと言われた。シューレの子は元気でいいと言われると反発した。ドラゴンクエストが好きで剣に興味を持ちスポーツチャンバラを始めた松島さんは、親が心配して見つけてくれた場所ではなく、自分で探し当てた場所が魅力となったという。

司会の奥地圭子さんは、「子どもがどこかへ行かなければ成長しないと思わせる社会があります。自分にあった生き方がそれぞれできればいい。安心できる居場所がその子にとってあるのか？家庭がまず居場所であってほしい。そして自分が自分でいいんだと思えるようになればと思います。」

大学生、小６、小３の娘の母親である西中間栄美さんは、二女と三女が小学一年生の一学期から学校へ行っていないと言う。二女は夏休みが終わって学校へ行く前の晩、一晩泣き続けた。顔つきもきつくなり、母親の後を追い、その時の様子があまりに辛そうで、一瞬一瞬が大変で、学校を休むことを受け入れるしかなかった。学校へ行くとか行かないとか、将来どうするかとか、世間体を気にするどころではなかった。必死だった。二女はしだいに落ち着いてきたが今の状態がとてもしあわせに感じられ、学校にもどってまたひどい状態になるのがこわかった。親が学校に行かなくてもいいと思っても二女は毎晩時間割を揃えていたが、朝起きられなかった。

その後二週間に一度児童相談所に通うよ

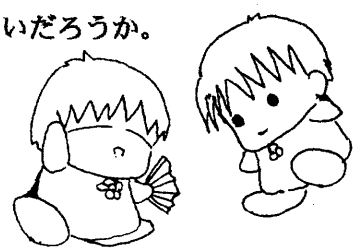
うになった。アドバイスは得られたが共感は得られなかった。千葉の親の会を知り、西中間さんは、ほっとした。ここが自分の居場所だと思った。親の会に行き始め親がみるみる元気になっていった。そして二女も元気になっていった。たまたま子どもを連れて行ったシンポジウムで二女は別室でシューレのスタッフの人たちと遊んでいた。そして次の日からシューレに行きたいと言った。歩いて数分の小学校には行かない二女は、現在二時間かけてシューレに通っている。「学校に行っている長女、フリースクールに通っている二女、家にいる三女、どの子も同じ感じで見ている。そういう風に見られるようになった自分が嬉しい。」

中２の時不登校となり２０歳となった今年結婚した娘の母親である浦島菊代さんは、「ずっと家で過ごした、あの子は、家にいつもいる子なんだなあと思って、彼女と一緒に過ごしてよかったなあと思える。」と言う。娘を見ていて、ぼうっとしているようでもいろいろ考えていることに気づいた。子どもが学校に行かなくなる勇気、「行かなくていいでしょう？」と親に言うまでにどれだけ勇気が必要だったろうと思う。落ち着いてきた浦島さんは、今、親の会をやっている。子どもが学校に行かなくなってパニックになっているお母さんの力になってあげられたらと思ってのことだ。「子どもからも話しを聞く態度。子どももひとりの人間として大人と同じように話を聞く姿勢を学びました。娘が不登校になったおかげでいいことがあったなあと思います。」

会場からは、当事者の若者からの「親が不登校を認めてくれない。親との関係の取り方と不登校を認められるようになったきっかけは？」という質問や「父親に対して言いたいこと」などがでた。

また、「社会（親、学校、近所も含めて）がどうしてくれたら楽になるか？」という質問に応えて、浦島さんは、「不登校１３万人となっても少数派にはちがいなく、学校に行かない生き方ももっと一般の人に知ってほしい。しんどい思いをして行くより生きていればいいという気持ちをもっと広めたい。」西中間さんは、「選択肢の一つとして、学校に行くこと家に居ることが自然に選べるような社会であればと思う。」松島さんは、「学校もダメ、外の世界もダメ、家の中も家族の理解がなくてダメという状態の時に、ここだったら君もＯＫだよという場所を作ってほしい。」須永さんは、「子どものことを理解していない専門家といわれる人たちが不登校対策会議をしている。こういうフォーラムも含めて子どもが出ていって変わっていく必要がある。」と語った。

体験者と親の話を聞くと見えてくるものがある。地道ではあるが、体験者を交えたこのような分科会を開いていくことにより、社会の仕組みが少しでも変わっていければと思う。少なくとも、不登校もひきこもりもＯＫなんだと親が思えるようになると、あり方を否定されて世間の目に耐えて苦しんでいる子どもや若者は、ずいぶん楽になるのではないだろうか。



分科会９

統合教育何でも相談室

——就学・学校の悩みを一緒に考えあう——

千葉県では障害のある子の３人に一人は普通学級で学んでいます。普通学級での就学の悩み、学校生活でのトラブルや悩みを一対一でゆっくりお聞きし、子供の立場にたって一緒に考えていく場として和室に相談室を作りました。

「東京シューレ」のメンバーと「共に育つ教育を進める千葉県連絡会」のメンバーがご相談に応じる体制をとりました。

相談に見えたのは普通高校進学を希望されている親の方２名でした。時期的に受験が差し迫っており、ご相談はすでに受験先を決めた方の高校へ提出する書類の書き方など、具体的で専門的な知識を必要とするものでした。相談室では自己申告書の書き方など具体的なことや受験時の不安について、担当者がゆっくり応じることができました。

第１０分科会　大漁旗にチャレンジ　つくろうMy　Flag！

担当　子ども劇場千葉県センター　　田中　令

講師　平田　智久（十文字女子大学教授）参加者数　午前　子ども　１２人　大人4人　スタッフ　2人

午後　子ども　１６人　大人　6人　スタッフ4人

＜ねらい＞

＊　子ども等が　参加しやすい分科会をもつ

＊　三世代交流「ようこそ大先輩」として　伝統を守って大漁旗を染め続けている銚子市在住の宮澤　紀年さん（染物屋　額賀屋の主人　６５歳）と　子ども達が出会い　技の確かさやその人柄に触れ染物をつくる体験を　共有しあう

＊　伝統を守ってつくっていること　旗のもっている意味などを教わり　子ども達は「ねがい　希望」など表現したいことを　布に染め上げる

＜当日のようす＞

＊　会場には色彩豊かな力強い大漁旗を２枚飾り雰囲気づくりにきをつかいました

＊　講師の宮澤さんが仕事の都合で急に参加できなくなり平田先生に教えてもらうようになりました染色家ではないが絵画　幼児教育の専門家である先生との出会いは子ども達にとっては親しみやすく「おっちゃん」とよんでお話ししている子もいました

＊　伝統を守っている宮澤さんについては　パネルを使いながら　仕事場のようす　大漁旗を染めていくようすなどを説明しました

＊　子ども達は本物の大漁旗を広げ　その大きさを実感したり　魚を釣り上げた後港に帰る船が旗を掲げる事を知ったり　大胆に染め上げてある図柄などを身近に見たりしました

＊　具体的に染色に取りかかり　小さい布（３４cm×３８cm）にのりを絞りだしながら絵を描きその中に筆で染色していくことを体験しました

＊　平田先生は誰でもが自分の力で準備し染色できるように１つ１つの作業をわかりやすく説明してくださり年長の子から大人までが思い思いの旗を染め上げました

＊　１日がかりで　２枚3枚と染めていく子もでて　１つ１つに主張があり楽しさや心の動きがうつしだされていました

＊　染め上げた旗はひもでつるして会場に飾りました

＜参加者の感想＞

＊　ちょっとむずかしかったけど楽しかった（7歳女）

＊　いろいろなことを学べ楽しかったです　これをバネにもっと大きいものを作って見たいですたのしかったです　またこのような会を開いてほしいです（１１歳男）

＊　今までまったく興味のなかった大漁旗をやってすごく楽しかった　１枚作るのに4時間近くかかってしまったけどすごくいい作品が出来た　来て良かったと思う　最初は来る気なんてなかったけどいい経験になった（１３歳女）

＊　青森にも八戸というところがあるのですがそこも漁業がとても盛んです　この分科会に参加し

た理由は「記念に残るモノを作りたい」というものからです　久しぶりに筆を持ちました　周りの子ども達の発想力！！にはとても驚きました　とても楽しい会でした
ありがとうございました（２２歳男）